

に深いトラフがみとめられる。まとまった低気圧もあり、特に著しいことは後面の寒気の強いことである。これはまた2節にのべられた中国における見解の d) とも考えられることである。

f) 図7のウルムチおよびノーチアンの時間経過図ではいずれも12月27日に強い寒気があらわれており、現象が110°Eにあらわれる前に90°Eのこれらの地点で十分トラフの強さを知ることができる。

g) ラッサではあまり明らかに変化していない。

5. 以上の僅か2例をもって結論を出すのは簡単すぎるが、チベット高原の北部において深いトラフの通過が認められるときは、結局その影響はかなり南の30°N付近にまで波及するものと思われる。これを判定するには90°Eにおけるウルムチなどのチベット高原北端の500

mbの時間経過図が有用で、中国地区またはその東方に対する予想に利用できると思われる。

文 献

- 1) 斎藤直輔 (1962): 気象庁電子計算室におけるルーチン傾圧モデルの概要, 電子計算室報告別冊第4号.
- 2) 竹永一雄 (1953): 明日の予報法の検討, 昭和27年度予報技術検討会資料, 福岡管区気象台.
- 3) 田辺三郎 (1948): 台湾低気圧に関する研究, 近畿気象研究報告第4号, 昭和23年.
- 4) 陶詩言 (1956): 冬季中国上空平直西風環流条件下の西風波動, 気象学報第27巻第4期.
- 5) 羅四維 (1957): 一個高空低槽越過西藏高原的分析, 気象学報第28巻第2期.

〔口絵写真説明〕 気象界国際交流

この9月にはBarkleyにおけるIUGGの総会に引き続いて東京においてURSIの総会が開かれたため、世界各国から地球物理関係の多勢の学者がアメリカをへて東京に集まった。当然のことながら、気象関係の人たちは折にふれて気象庁を訪れたが、IQSYを来年にひかえて、日本の気象観測計画に対する関心は大きかった。

国際オゾン委員会の委員長Ramanathan教授(インド)はオゾン観測について話し合うために9月20日気象庁を訪問し、長官室で2時間あまり活潑な討論を行なった。討論は多くの問題について行なわれたが、特にオゾンゾンデによる垂直分布の測定はアメリカ、ヨーロッパを除いては日本だけが計画しているので、その成果には多大の期待を寄せていた。我々は日本の光学的オゾンゾンデの実物を示して説明し、化学的ゾンデの概要について述べたが、教授は将来は化学的な測定方法が望ましいとの意見を述べていた。これは化学的測定がより絶対測定に近いということによるようである。

同じオゾン関係では、パリの科学院からVassy夫人がみえ、主として光学的測定法について意見をかわした。Vassy夫人はRamanathan教授とは反対に光学的方法の利点を強調し、面白い対照をみせたが、夫人が光学的オゾンゾンデを設計し、かつ測定を行なっているためと、その興味が光化学反応の起る30km以上の高度の

オゾン分布に関心が深く、このような高々度では化学的測定方法が困難だと考えられるためであろう。

(関口理郎記)

IUGGのIAMAPとIAGAとの気象電気連合委員会委員長、L. Koenigsfeld教授(ベルギー)がBerkeleyの総会直後日本に立寄り、気象庁を訪問した。彼はまたCIMOの気象電気測定作業委員会の議長をしている。この作業委ではIQSYに使用する気象電気用ラジオゾンデの比較観測をすることを当面の任務としているので、前もって2個のベルギーのゾンデが送られてきて、日本のものと比較しようということになっていた。9月5日に館野で両者の比較観測をおこなった。ベルギーのゾンデはアメリカ製ルーチンゾンデの湿度の代りに電位傾度を測定できるように改造してある。比較観測は午前と午後それぞれ一回づつ行われた。午前のものは準備不十分の点などあって成功しなかったが、2回目は成功した。

この写真は9月4日彼が気象庁を訪問し、長官に会ったときのものである。長官がベルギーのウクル気象台を訪問したときのことなど話合い、なごやかなひとときをすごした。

なお西独Tübingen大学R. Mühleisen教授も気象電気作業委員会の委員をしており、URSI総会出席のため、来日した。彼の滞在中、日本のゾンデと西独のゾンデとの比較観測を9月11日館野で行い、一回の飛揚であったが、良好な結果を得た。(内川規一記)